# プラトンと愛智会、シェリング

## ヴェネヴィーチノフの詩人像を中心に

坂庭　淳史

### はじめに

「プラトンとロシア」についてはこれまでにもさまざまな人物やテーマ、ジャンルを扱った研究がなされてきている。しかし、時代という点から考えてみるならば、19 世紀後半から 20 世紀のロシアに関する研究が充実している一方で、19 世紀前半についての研究や情報量は少ないように思われる。

本論文では、19 世紀前半、とりわけ 1820 年代中頃のロシアにおいてプラトンがどう受容されていたのかを考察する。おもな考察対象は、ロシア最初の哲学サークルで、ロシアでのシェリング哲学普及に努めた「愛智会」、およびその中心人物ドミトリー・ヴェネヴィーチノフである。プラトンとシェリングの思想の類縁性はよく知られているが、本論文ではプラトンの『国家』のいわゆる「詩人追放論」に注目して二人の哲学者の詩人／芸術家観の差異を明らかにし、さらにプラトンと 1820 年代中頃のロシアの関係を検討してゆく。

### 1．19 世紀前半の「プラトンとロシア」

まずは 19 世紀前半の「プラトンとロシア」を考えるための手がかりを示したい。

先行研究では、チホラーズの『19 世紀後半から 20 世紀初めのロシア宗教哲学におけるプラトンとプラトニズム』(2003)[1]がユルケーヴィチやソロヴィヨフ、フロレンスキイといった思想家を取り上げ、表題の通り 19 世紀後半から 20 世紀初めのロシアに光をあてている。そして、彼はその前史部分にあたる第 1 章では、11 世紀から 17 世紀におけるブルガリアやポーランドを媒介したプラトン哲学の影響について検討している。また、スヴェトローフはロシア文化におけるプラトン、プラトニズムの歴史を概観しながら、「18 世紀中頃まで、わが国［ロシア］の文化においては、プラトンはその意味が真剣に理解されるというより、

[1] *Тихолаз А.Г.* Платон и платнизм в русской религиозной философии второй половины XIX - начала XX веков. К.: Инсайт, 2003. С. 74-75. なお、考察対象年代をほぼチホラーズと同じように設定しているのがネザーコット(Frances Nethercott, *Russia's Plato: Plato and the Platonic Tradition in Russian Education, Science and Ideology (1840-1930)* (Aldershot, Burlington, Singapore, Sydney: Ashgate Publishing, 2000).) であり、彼女は「ロシアにおけるプラトン学のリバイバルへの 18 世紀の貢献をかなり過小評価することになってしまう」と断りながら、その考察の始点を 1841-1842 年（カルポフ訳）、終点を 1922-1929 年（カルサーヴィンら訳）と、プラトンの二つのロシア語訳著作集で示している。

どちらかというと、言及されてきていた［…］状況が変化したのは 19 世紀中頃であった」[2]と述べている。「19 世紀前半」があまり考察対象になってきていないことはこうしたことからも十分予想可能であろう。

ただし、チホラーズは 18 世紀、19 世紀のロシア思想について、簡潔ではあるが有意義な指摘をしている。

> ある種の自立し、なおかつ同時代の世界基準に相応するものとしてのロシア思想を形成してゆくロシアの思想家たちはプラトンに興味を持った。その最も重要な要因は、彼らが当時西欧で人気の高かった哲学の教義に熱中したことであろう［…］実際のところ、ロシア哲学の形成において大きな役割を果たしたシェリング哲学は、ロシアの思想家たちをプラトニズムに引き込む「運河」の一つとなった[3]。

同じようにネザーコットも「［プラトンの］思想の様々な側面が反映されているのは、ドイツ観念論のモチーフの「ロシア化」の複雑なプロセスにおいてである」[4]と述べている。そこで本論文では 19 世紀前半にロシアに導入されたシェリング哲学を手がかりに、考察を始めることにする[5]。

1-1. シェリングとプラトン

具体的な考察の前に、シェリング、およびシェリングとプラトンの関係に触れておく。

フリードリヒ・シェリング(1775-1854)はドイツ観念論哲学者で、ヘルダーリンをはじめ、ゲーテ、ティークなど多くの文学者たちとも親交があった。彼は主観、客観の同一性を唱え、自然と精神とを絶対者の二つの現象形式とし、絶対者においては主観と客観が無差別的に同一であると主張した。また、自然の根源を世界霊（宇宙霊）とし、自然と精神との最高の統一形態を芸術に見出し、美的観念論によってロマン主義哲学の基礎を築いた。

このシェリングの哲学と強いつながりを持っているのが、他ならぬロシアである。ロシア思想に関する書物には「ロシアのシェリング哲学 русское шеллингианство」という言葉がしばしば見られるし、また『19 世紀ロシアにおけるシェリング哲学』という研究書では「ロシアにおけるシェリングの哲学概念の運命は独特な歴史的哲学的現象であり、一世紀にわたってロシアの哲学状況を形成していた。［…］シェリングは、ドイツにとって以上にロシアにとって意味深い」[6]［下線強調は引用者］とも書かれている。

---

[2] *Светлов Р.В.* «Русский Платон» Платонизм в русской культуре // Платон: pro et contra. СПб.: РХГИ, 2001. С. 13.

[3] *Тихолаз А.Г.* Платон и платнизм в русской религиозной философии второй половины XIX - начала XX веков. С. 74-75.

[4] Nethercott. *Russia's Plato*, p. 1.

[5] ただし、シェリングがプラトンから大いに影響を受けていて共通事項も多いため、シェリング、プラトンそれぞれからの影響の厳密な確定が困難であることを断っておきたい。

[6] Философия Шеллинга в России XIX века. Ред. В.Ф. Пустарнаков. СПб.: РХГИ, 1998. С. 366.

シェリング自身とプラトン哲学の結びつきはどうなっているであろうか。シェリングの初期著作には、彼が「古代世界の表象(イメージ)様式」と呼ぶものについての学生時代の研究ノートがある。そこでは古代哲学、とりわけプラトン哲学に関する考察がなされ、人間の技巧に対する霊感や神がかりなどが取り上げられている。また、『ティマイオス注釈』(1794)でシェリングはプラトンの『ティマイオス』の数節に関する注釈を書いているが、宇宙の始元と生成に関する問題提起やそれに関連するイデアと質料の概念に対する注釈そのものが、のちのシェリングの自然哲学の形成に重要な意味を持っていると言われている[7]。

1-2. 19 世紀前半のロシアとシェリング哲学

19 世紀前半のロシアにおいてシェリング哲学はどのように論じられていたのであろうか。ここでは当時のロシアにおける「シェリングとプラトン」に関する 3 つの言及に注目する。はじめに挙げるのは、当時の哲学史研究者たちの一般的な理解の例として、『19 世紀ロシアにおけるシェリング哲学』の中で紹介されているものである。

> ［シェリングの］世界霊についての教義は、プラトンの哲学体系における最も重要な教義のひとつであり、また、世界霊から個々の魂をいかに個別化していくかという問題はプラトニズムの最も複雑な問題の一つである。この問題はプラトンの多くの著作で考察されているが、とりわけ明確なのは『国家』で、とくにその第 7 巻においてプラトンの「洞窟のシンボル」、光と太陽のシンボルとともに考察されている[8]。

シェリングの世界霊とプラトンのイデア論の類縁性が理解されているが、二人の哲学体系の近さはこのときまでにすでに何度か言及されてきている[9]。

次にロシアにシェリング哲学を導入した人物の発言である。ペテルブルグの外科医学アカデミー教授の自然哲学者ダニーロ・ヴェラーンスキー(1774-1847)は、「シェリングは失墜していたプラトン哲学を復活させ、それに古代ギリシャ人たちが全く有していなかった、輝かしく、偉大な形式を与えた」[10]と述べ、さらに彼を「新たなプラトン」[11]と呼んでいる。

シェリング哲学導入者の代表的人物としては、もう一人、イヴァン・ダヴィードフ(1794-1863)がいる。彼はモスクワ大学の教授で、数学者、物理学者、哲学者でもあった。

---

[7] シェリング哲学研究者のヤンツェンは「シェリングの哲学は一方で、きわめて早い時期に取り組まれたプラトンの『ティマイオス』の研究を基礎としている」と述べている（J. ヤンツェン著、北澤恒人訳「自然の哲学」、H.J. ザントキューラー編、松山寿一監訳、『シェリング哲学――入門と研究の手引き』昭和堂、2006 年、122 頁）。

[8] Философия Шеллинга в России XIX века. С. 375.

[9] Там же.

[10] *Велланский Д.* Предисловие к переводу кн.: *Голуховский И.* Философия, относящаяся к жизни целых народов и каждого человека. СПб., 1834. С. IV.

[11] Там же. С. VI.

現代哲学における知の方向と能力に関してヘーゲルとシェリングの関係は、古代におけるアリストテレスとプラトンの関係に等しい。創作、詩的霊感、魅力的な言い回しは同じようにプラトンとシェリングにあり、判断力、最高に洗練された弁証法、数学的な言語はアリストテレスとヘーゲルの特質である[12]。

ダヴィードフは同時代のドイツ哲学を古代ギリシャ哲学にたとえ、プラトン＝シェリング（アリストテレス＝ヘーゲル）という図式を作り出している。

ただし、これらの発言の背景にロシア独自の事情があることも考慮しなければならないだろう。ロシアでは 19 世紀に入って検閲制度が本格的に整備され、神学検閲 духовная цензура もまた強化されてきた[13]。ペテルブルグ大学では哲学の教授ガーリチをはじめ数名が「不穏当な思想」を理由に放校処分になり、他大学でも出版物が発禁処分にされることがあった。また、国外出版物は警戒され、なかでもシェリング哲学において示される「神以前」のカオスの存在、あるいは自然＝神という考え方は危険視され、キリスト教、正教の側からの根強い批判の対象となった。そんなロシアのキリスト教がむしろ確かなつながりを強調したのが、プラトンであった。当時の検閲とプラトン哲学の関係をアブラーモフは以下のように論じている[14]。

一般検閲と宗教検閲は、哲学思想の自由が政治的・宗教的自由思想へ行き着くと結論した。現行体制を脅かすことのない、穏当で保守的な風潮を求める必要が生じた。こうした風潮によって呼び出されたのがプラトニズムであり、神学アカデミーの哲学コースにはプラトン哲学研究が正式に導入された[15]。

こうした記述からも当時のロシア思想においてプラトンの持つ意味が理解できよう。決定的なのは 1814 年 8 月 30 日付の神学アカデミーの規約である。

さまざまな人々の思想が群れなす中で、教授が遵守すべき連綿と続くものがある。それは福音書の真実である。唯一の、真の、最高の哲学の光を見ることは、キリスト教の

---

[12] *Давыдов И.И.* Возможна ли у нас германская философия // Москвитянин. 1841. Ч. II.

[13]「宗教・文部省の設立は 1817 年に宗教検閲を活発化させ、神学検閲は一般検閲を圧迫した。神学検閲の指導者たちが大学に関する事項、文学作品やジャーナリズムに対する検閲に干渉していたことなどがそれを物語っている」(*Жирков Г.В.* История цензуры в России XIX-XX вв. М.: Аспект Пресс, 2001. С. 51.)。

[14] ロシアのキリスト教とプラトン、シェリングの類縁性と差異については、杉浦秀一「ロシア・プラトニズムとウラジーミル・ソロヴィヨフ」『プラトンとロシア』(21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集第 12 号)、北海道大学スラブ研究センター、2006 年、1-15 頁に詳しい記述がある。

[15] *Абрамов А.И.* Философия в духовных академиях (традиции платонизма в русском духовно-академическом философствовании) // Вопросы философии. 1997. № 9. С. 140.

教えの中に求めぬ限り自分にも教え子にもない、教授はそう確信していなければならない。［…］古代［哲学］においては、プラトンが真の哲学の最初の柱である[16]。

教授が遵守すべきものとしてキリスト教とプラトンが並べられている。この規約は神学アカデミーのみならず、大学の教授たちも意識せざるを得なかった。規約が「プラトンとシェリング」の関係に与えた影響について、プスタルナコフは以下のようにまとめている。

［神学アカデミーと同様、大学の教授たちもシェリングとプラトンを比較したが］プラトンとの類推で判断することはやはりイデオロギー状況に従うものであり、認識基準によるものではなかった。当時の神学アカデミーにおいては、これは 1814 年の規約によるノルマであった[17]。

シェリング哲学がプラトンから影響を受けていることは既に述べたが、19 世紀前半のロシアでは検閲や神学アカデミーなど思想をとりまく条件がさらに二人を引き寄せていた。必然的にシェリングはプラトンと関連付けて取り上げられるようになる。前出のヴェラーンスキーやダヴィードフの発言は、「伝統的にキリスト教と強い結びつきを保ってきたプラトン哲学は、教会が公式に認める哲学である。したがってプラトンに近いシェリングもまた安全なのだ」ということを言外に匂わせているのである。このように「ロシアのシェリング哲学」の背後にはプラトンの影、あるいは威光が感じられるのである。

## 2. 愛智会

このようなロシア思想界において誕生したのが、愛智会 Общество любомудрия だった。まずモスクワ大学付属の貴族寄宿学校の中で教師ラーイチのもとに学生が集い、この会の前身となる文学サークルが発足する。そのなかからさらに哲学に興味を持つ青年たちが中心になって 1823 年、愛智会が作られた。おもなメンバーとしては、リーダー的な存在としてアレクサンドル・オドーエフスキー(1802-1839)とドミトリー・ヴェネヴィーチノフ(1805-1827)の 2 名、さらにアレクサンドル・コシェリョーフ(1806-1883)、イヴァン・キレーエフスキー(1806-1856)、ニコライ・ロジャーリン(1805-1834)などがおり、他にピョートル・キレーエフスキー(1808-1856)、アレクセイ・ホミャコーフ(1804-1860)、スチェパン・シェヴィリョーフ(1806-1864)、ミハイル・ポゴージン(1800-1875)、ウラジーミル・チトーフ(1807-1891)らも参加していた。

モスクワ大学教授パーヴロフ(1793-1840)を後見人とし、美学、歴史哲学、倫理学、ドイツ観念論とりわけシェリング哲学に興味を持った彼らは、世界霊あるいは宇宙や世界の有

[16] Проект Устава Духовных Академий. СПб., 1814. С. 55. ただし引用は http://www.ido.edu.ru/philosophy/chrest/1-4.html による。
[17] Философия Шеллинга в России XIX века. С. 136.

機的総合といった概念を独自に適用していった。1824 年から 1825 年には「ドイツで光を放つシェリング、オーケンといった新しい思想を普及させること、ロシアではあまり知られていないものに読者たちを注目させること」[18](Ⅳ-233)を第一の目的として、雑誌『ムネモシュネーМнемозина』を刊行している。ロシアにおいてそれまで未発達であったロマン主義美学の形成に彼らが果たした役割は大きい。1825 年末、デカブリストの乱が起こると、事件との関連を当局から追及されることを恐れて愛智会は解散することとなった。公式の活動はわずか 2 年間で終了したが、メンバーの交流、活動はその後も長く続いた。

2-1. 哲学と詩の融合

愛智会の活動領域は広く、文学、詩も含まれていた。雑誌『ムネモシュネー』にはキュヘリベーケルの論文「最近 10 年間のわが国の詩、特に抒情詩の方向性について О направлении нашей поэзии, особенно лирической в последнее десятилетие」が掲載されている。キュヘリベーケルは愛智会の純粋なメンバーとは言えないが、その思想に共鳴したデカブリスト詩人である。この論文を愛智会全体の詩についてのマニフェストと考えてもよいだろう。彼はロシア詩に見られる外国詩の模倣や、紋切りの氾濫、不毛な言葉の使用などを挙げ、ロシア文学の危機的状況を認識し、ロマン主義詩とは何かを問いかけている。

シェヴィリョーフやホミャコーフも詩人であったが、愛智会の詩の活動の中心はヴェネヴィーチノフで、この愛智会自体が「ヴェネヴィーチノフのサークル」と呼ばれることもある。彼もまた当時のロシア文学に不満を持っており、「メルズリャーコフの見解分析 Разбор рассуждения г. Мерзлякова」(1825)では詩の模倣性を断罪している。また、ロシア文学において啓蒙が進まない原因として「文学の本質を受容する前に、文学の形式を受容してしまったこと」を挙げ、その本質にすべての学問の基礎である哲学をすえることを主張した。「すべての民族と、すべての時代の真の詩人たちは深遠な哲学者であった」[19](131)と考えていた彼は、「『エヴゲニー・オネーギン』論分析 Разбор статьи о «Евгении Онегине»」(1825)では「詩は哲学と切り離せないということを［…］私たちは忘れていないだろうか？」(146)と述べている。そして文壇で望まれていた「新しい詩」の試みとして彼が構想したのが「哲学と詩の融合」であり、これが愛智会全体の旗印ともなってゆく。

また、ヴェネヴィーチノフは愛智会メンバーのコシェリョーフ宛の 1825 年 7 月中旬の書簡で「あらゆる知の目的、哲学の目的とは、世界と人間の調和なのです」(349)と目的を掲げるが、ここで彼の言う「哲学」こそ『先験的観念論の体系』(1800)をはじめとするシェリング哲学なのである。この「目的」はシェリングの「すべての知識は主観的なものと客観的なものとの一致にもとづいている。［…］我々の知識における、すべての単に客観的なも

---

[18] 引用は Мнемозина. Собрание сочинений в стихах и прозе. Hildesheim: G.Olms, 1986 (reprint). により、括弧内に巻 часть 数をローマ数字で、頁をアラビア数字で記す。

[19] ヴェネヴィーチノフの引用は *Веневитинов Д.В.* Стихотворения. Проза. М.: Наука, 1980. により、括弧内に頁数を記す。

のの総体を我々は自然と呼ぶことができる。これに対してすべての主観的なものの総体は自我あるいは叡智と呼ばれる」[20](2-339)という思想からの影響があると考えられる。

2-2.　詩と詩人像

愛智会の詩人たちは「哲学と詩の融合」を思想的背景とし、何よりも当時のロシア詩の停滞ぶりを憂えていた。必然的に彼らの作品の多くは「詩人」や「詩」をテーマとしたものになっていくが、これらはレールモントフらも含めて 1830 年代のロマン主義全体の創作傾向とも言える。同時代の詩に満足していなかった彼らは新しい詩、詩人像をそれぞれに提示しようとしたが、全体に共通する詩人像としては、「霊感に満ちた詩人」、「選ばれた者」、「最高の知識と啓示の持ち主、天才」[21]などがある。ホミャコーフの詩「詩人 Поэт」(1827)では、「彼は安らかなまなざしを空へ向けた／すると、心の中で神への賛歌が生まれた／彼は与えたのだ、地上には調和した声を／死すべき創造物には言葉を」[22]とあり、詩人である「彼」は天、神に選ばれ、特別な力で大地に声を与えている。次に示すのは、ヴェネヴィーチノフの詩「詩人と友 Поэт и друг」(1827)である。「詩人」と「友」との対話形式の作品の中で、「詩人」は以下のように語る。

| | |
|---|---|
| Природа не для всех очей | 自然はすべての人々に見せるために |
| Покров свой тайный подымает: | 秘密のおおいを持ち上げるのではない。 |
| Мы все равно читаем в ней | 我々はみな自然のなかに同じように読み取るけれど、 |
| Но кто, читая, понимает? | それを読んで理解しているのは誰か？ |
| Лишь тот, кто с юношевских дней | それは若いときから |
| Был пламенным жрецом искусства, | 芸術に熱心に仕えてきた祭司のみ、 |
| … | （中略） |
| Тому, кто жребий довершил, | さだめをなし終えたものには、 |
| Потеря жизни не утрата — | 命を失うことも損失ではない |
| Без страха мир покинет он! | 恐れることなく彼は世を去っていく！ |
| Судьба в дарах своих богата, | 運命はさまざまな才能に満ちている、 |
| И не один у ней закон: | そこにはひとつの法だけがあるのではない。 |
| Тому — процвесть с развитой силой | ある者はみなぎる力で花ひらき |
| И смертью жизни след стереть, | 死によって生の名残を拭い去る |
| Другому — рано умереть, | またある者は夭逝するが、 |

[20] 以降のシェリングの引用は断りのない限り、*Schellings Werke: nach der Originalausgabe in neuer Anordnung*, hrsg. von Manfred Schröter (München: C.H. Beck, 1971-1984). により、括弧内に巻数、頁を記す。なお、日本語訳はシェリング著、赤松元通訳『先験的観念論の体系』蒼樹社、1948 年を参考にした。

[21] *Гинзбург Л.Я.* О лирике. М.: Интрада, 1997. С. 62-63.

[22] *Хомяков А.С.* Полное собрание сочинений в 8 т. М., 1900-1914. СПб., 1914 Т. 4. С. 4.

Но жить за сумрачной могилой!　　薄暗い墓の向こうで生きるのだ。(75、下線強調は引用者) [23]

このヴェネヴィーチノフの詩人像とプーシキンの詩人像の類縁性が指摘されている。アメリカの研究者プラットはシェリングの芸術家観（天才、選ばれた者）と関係があり、ロシア詩において発展した詩人像のひとつ、「哲学者あるいは祭司としての詩人」の例として、プーシキンの詩「詩人 Поэт」(1827)、「詩人に Поэту」(1830)とこの「詩人と友」を挙げている[24]。3 篇に共通するのは詩人が「神に選ばれた祭司 жрец」だという点である。

さらにこの詩の詩人は「みな」には理解できない「秘密のおおい」の中にある自然を理解している。この詩人イメージの源泉の一つになっているのが、シェリングの芸術哲学にある、芸術家についての次のような概念である。

> 言わば他の人よりも優れて、言葉の最高の意味において芸術家である稀なる人々においてはすべての存在が、それの上に載せられている、かの不変なる同一者が、彼の覆いを取り除く、――しかし他の人々にはこのような覆いで隠されている［…］(2-616)

また、シェリングは芸術／詩を最上のものと考えた。『ドイツ観念論最古の体系綱領』(1796/97)で彼はプラトンをふまえて美の役割を論じ、哲学者と詩人の姿を重ね合わせている。

> 一番最後に来るのは、すべての理念を統一する理念、より高次の、プラトン的な意味で理解される美の理念である。いまや私は確信する。理性の最高の作用、つまり理性がすべての理念をそのなかに包括している作用とは美の作用であり、真と善とはこの美の中でのみ兄弟のように一つに結びつけられている、と。哲学者は詩人に匹敵する美的能力を持たなければならない。［…］このことによって詩はいままで以上の尊厳を手に入れる。［…］もはや哲学も歴史も存在しなくとも、ただ詩作の業のみは他のあらゆる芸術をこえて生きながらえるだろうからである[25]。

芸術が哲学にとって至上であるとし、哲学と芸術を合わせ、真善美の中でも美を重要とする考えをシェリングから受け継いだ愛智会のメンバーは、さらに詩の高邁な役割について語っている。シェヴィリョーフは「市民社会の幸福に対する詩と雄弁術の影響について О влиянии поэзии и красноречия на счастие гражданских обществ」(1823)で、「真の高邁な詩と

---

[23] ヴェネヴィーチノフはこの詩を書いてすぐに亡くなるため、彼は詩人としての己の運命をこの詩によって予言していたとも言われる。これに関してマイミンは「ロマン主義的感覚と体験の世界は、ヴェネヴィーチノフの詩の領域に関わるだけでなく、彼自身の、実際に生きている世界でもあった」(429)と、詩的世界と実生活の強い結びつきを指摘している。

[24] S. Pratt, *Russian Metaphysical Romanticism: The Poetry of Tiutchev and Boratynskii* (Stanford: Stanford University Press, 1984), pp. 96-97.

[25] H.J. ザントキューラー著、浅沼光樹訳、「F.W.J. シェリング（生成の途上にある作品）――入門」ザントキューラー編『シェリング哲学――入門と研究の手引き』、12 頁より引用。

は風紀を指導する教師であり、私たちの中に真と善への高尚な志を呼び起こすのだ」[26]と述べ、チトーフは「詩人の長所について О достоинстве поэта」(1827)という文章で、「あらゆる真の詩は、私たちを哲学的な思想へと導き、反対に、あらゆる真の哲学はすべての存在に対する喜ばしい、詩的なまなざしを私たちに与えてくれる」[27]と論じている。

## 3.「哲学と詩の融合」とプラトン

プラトンと愛智会の接点について具体的に検討してゆこう。プラトンと切り離すことのできないシェリング哲学を信奉し、さらに「哲学と詩の融合」を旗印として独自の詩人像を模索していた愛智会のメンバーにとって、厄介な存在となってくるのがプラトンの『国家』第 10 巻のいわゆる「詩人追放論」である。

### 3-1.『国家』第 10 巻（「詩人追放論」）

『国家』の根本には、詩人と異なりイデアに触れることのできる哲学者を国の指導者に、という主張がある。『国家』第 7 巻のイデア論にもとづく第 10 巻は、ソクラテスとグラウコンの対話からなるが、そこでは寝椅子を例に、「イデア界にある寝椅子」、「大工の作品としての寝椅子」、「画家の作品としての寝椅子」という順に並べ、「第 3 番目の作品を産み出す者」と呼ぶ画家の作品の価値を模倣のレベルによって最も下に置いている。ここではあらかじめ問題点を明らかにするために、この巻のいくつかの論点を順に抜き出しておく。

> 引用 1：詩（創作）のなかで真似ることを機能とするかぎりのものは、けっしてこれを［われわれの国へは］受け入れないということだ。というのは、ぼくは思うのだが、それを絶対に受け入れてはならぬということは、魂の各部分の動きがそれぞれ別々に区別された今になってみると、前よりもいっそう明らかにわかっているわけだからね[28]。(302)

プラトンはすべての詩の本質であるミメーシスを否定し、大詩人ホメロスでさえも例外とせずその批判対象としている。また、他の箇所では「自分の内なる国家」(338)でもある魂や人間の内面について言及しているように、『国家』が単なる政治論ではなく、教育・道徳論的側面も備えていることを看過してはならないだろう。

> 引用 2：［悲劇作家をはじめその他すべて真似を仕事とする人々は］、聴く人々の心に害毒を与えるようなのだ。聴衆のほうで、それらの仕事がそもそもどのような性格のもの

---

[26] Вестник Европы. 1823. № 8. С. 252.
[27] Московский вестник. 1827. Ч. II. № 7. С. 235.
[28] プラトン『国家』（第 10 巻）の引用は、プラトン著、藤沢令夫訳『国家（下）』岩波書店、1979 年により括弧内に頁数を記す。なお、『国家』第 10 巻の内容については、E.A. ハヴロック著、村岡晋一訳『プラトン序説』新書館、1997 年も参考にした。

であるかという知識を、解毒剤としてもっていないかぎりはね。(302)

引用 3：どこかのいかさま師・物真似師に出会ってまんまとだまされたあげく、その男が全知の人だと思いこんでしまったらしいね。ほかでもない、君自身が知識と無知と真似とをしらべて区別することができないからだ。(312)

人間の内面に対する詩の有害性が語られ（引用 2)、単なる模倣と学問的知識（エピステーメー）が対置されている。キュヘリベーケルやヴェネヴィーチノフは同時代の詩の危機を憂えているが、プラトンの時代には教育制度も含めて詩がもてはやされており、彼は世に広まっていた「詩人万能論」に異を唱えているのである。

引用 4：われわれが頑固で粗野だと非難されないためにも、哲学と詩（創作）との間には昔から仲違いがあったという事実を、詩（創作）に向かって言い添えておくことにしよう。(336)

哲学と詩の折り合いの悪さが確認されている。哲学を否定し、詩を礼賛する風潮をプラトンは批判するが、愛智会の旗印「哲学と詩の融合」はこの主張と対立せざるを得ない。

引用 5：詩の保護者たちに対しても、彼らが韻律なしの言葉で詩のために弁じる機会を与えて、詩がたんに快いだけではなく、国のあり方と人間の生活のために有益であると論じることを許すだろう。そしてその言い分を、われわれは好意をもって聞くだろう。なぜならば、それがただ快いだけでなく有益であることが明らかになるならば、われわれもそれだけ得をすることになるだろうから。(338、下線強調は引用者)

議論の最後に、詩のための弁明の余地が残される。この言葉は、プラトンが自身の確信に反して、国と人間にとって詩が有益であってほしいと望んでいるようにさえ思わせるが、これが本論文で後に考察するヴェネヴィーチノフの試みへとつながるのである。

3-2.　愛智会メンバーの「詩人追放論」への反応

「詩人追放論」については、一般的に言って、プラトンの皮肉であるとか、一時的な考え、ためらいであるとしてプラトンの熱烈な崇拝者たちでさえ逃避手段を模索したというが、この主張が愛智会にどれだけの衝撃を与えたことだろう。ユーリー・マンは「プラトンがその理想の国家から詩人たちを追い出したことに、ロシアの美学者たちは大いに困惑した」[29]と記している。プラトンとシェリングの思想的な近さを論じてきた人々の中で、自然哲学や認識論に興味を持っていたパーヴロフのような人はまだしも、とりわけシェリン

[29] *Манн Ю.В.* Русская философская эстетика. М.: МАЛП, 1998. С. 234.

グの「芸術哲学」およびその「詩人」像を受け入れ、「哲学と詩の融合」を掲げた愛智会の詩人たちには「詩人追放論」は避けては通れない大きな関門となった。また、これまで同じ思想の系列の中で捉えてきたはずのプラトンとシェリングの間に、芸術と哲学をめぐって生じた齟齬としても認識されたと思われる。愛智会のメンバーの「詩人追放論」への反応もさまざまである。

オドーエフスキーは論文「美的芸術理論の試み Опыт теории изяшных искусств」(1830)で、プラトンに真っ向から反論する。

> 霊感が訪れる瞬間、彼は自分が生きる時代の一時期の処方を獲得する。そして、反自然でない、自然な道にあるべく人類が向かわなければならないその目標を提示する。他のすべての人々はそれを実行するだけである。だからこそ、プラトンに反して、詩のスチヒーヤは政治的な社会の成員とならなければならないのだ[30]。

詩の社会性を説くオドーエフスキーから見たとき、プラトンとシェリング（および愛智会）の詩をめぐる考えの対立は明らかである。

シェヴィリョーフは、プラトンの考えを特定の状況下で有効なものと見なしている。すなわち「詩人追放論」は「同時代のアテネにおいて芸術がどんな関係におかれていたかということ」から生じたものであり、「普遍、無条件の真実のほかに局地的な真実がある」[31]、この考えは普遍的事実ではなく、現代ロシアにはそぐわないと言うのである。

チトーフは、「[プラトンは] 詩が若者に及ぼす影響を断ち切ろうとしていたのではなく、詩が若者を国家から引き離さないよう、しかるべき範囲に収めようとしていたのである」[32]と教育論としてとらえ、プラトンを擁護した。さらに、これらのメンバーとは別の視点からプラトンの考えを受け入れつつ、詩／詩人論として反応したのが、ヴェネヴィーチノフの対話篇「アナクサゴラス——プラトンの語らい」(1825)であった。

## 4. ヴェネヴィーチノフ

ドミトリー・ヴェネヴィーチノフは 1805 年に生まれ、幼少時からさまざまな家庭教育を受け、フランス語、ドイツ語、ラテン語、古代ギリシャ語が堪能であった。14 歳でホメロス、アイスキュロス、ソフォクレス、ヴェルギリウス、ホラチウスなどを原文で読んでいたという。モスクワ大学では、帰国したばかりのパーヴロフのもとでドイツ哲学に熱中し、解剖学や数学なども積極的に学んだ。1823 年、大学を卒業した彼は外務省のモスクワ古文書館に勤務した（メンバーの多くが古文書館で働いていたため、「愛智会」はまた「古文書館の若者たち архивные юноши」と呼ばれることもある）。デカブリストの乱の後、1826 年

---

[30] Русские эстетические трактаты первой трети XIX века. М.: Искусство, 1974. Ч. II. С. 178.
[31] *Манн Ю.В.* Русская философская эстетика. С. 234.
[32] Московский вестник. 1827. № 13. С. 71.

11 月に彼はペテルブルグで逮捕される。ともに捕まったフランス人がヴェネヴィーチノフの召使を装ってモスクワへ行き、シベリアに向かうデカブリストの妻たちに非合法に随員しようとしていたという理由であったが、取調べを受け数日後に釈放される。そして 1827 年 3 月初め、風邪をこじらせ 21 歳という若さで亡くなっている。前年の逮捕と拘留中に受けた精神的・肉体的ダメージが死の一因だとも言われている。

4-1. プラトンへの愛着

ヴェネヴィーチノフの作品集に付されたマイミンの論によれば、「少年時代から古代の哲学、なかでもプラトンに熱中しており、プラトンの深遠な思想だけでなく、その思想のポエジアについても評価していた。後に、プラトンが愛智会のメンバーすべてにとってお気に入りの哲学者となったのは特筆すべきだ」[33]とある。愛智会のプラトンへの関心の中心には、少年時代からプラトンに親しんでいたヴェネヴィーチノフがいたと考えられるだろう。

ヴェネヴィーチノフは 1825 年 7 月のコシェリョーフ宛の二つの書簡でプラトンについて熱心に語っている。7 月中旬の書簡では以下のように書かれている。

> プラトンの最もよい版はラテン語訳のついた新しい版[34]です。最近僕はプラトンを買ったのですが、これには疲れました。翻訳も覚書もないので、読むのにとても時間がかかるのです。(351)

ここから、彼がプラトンを翻訳なしで読んでいることが分かる。次の 7 月 20 日から 25 日ごろに書かれたとされる書簡では、彼のプラトンへの入れ込み具合が伝わってくる。

> 今は以前よりもずっと腰をすえて勉強に励んでいるのですが、数ヶ月間をプラトンとオーケンに捧げることにしました。プラトンに慣れてきました。かなり読みこなしています。彼には驚かざるを得ませんし、彼についてじっくり考えずにはいられません。これこそイデアリストです！［…］あなたに論文を送ります。(352)

この書簡の冒頭で彼は、「私にとっての喜びと熱狂の源泉であるシェリング」(351)について述べ、さらにシェリングの『自然哲学』からの抜書きの必要を記している。この時期の

---

[33] *Маймин Е.А.* Д.Веневитинов и его наследие // *Веневитинов Д.В.* Стихотворения. Проза. С. 411. その他にも、「青春時代のあらゆる強烈な印象と同じように、プラトンが私に与えた深い印象は今でも残っている」というオドーエフスキーは、「難しい箇所はパホーモフによるロシア語、あるいは正確に言えばスラヴ・ロシア語の翻訳に導かれながら、ギリシャ語でプラトンを学び、読んでいた」という(*Одоевский В.Ф.* Русские ночи. Л.: Наука, 1975. С. 191.)。また、シェヴィリョーフはプラトンの著作を翻訳していた(*Манн Ю.В.* Русская философская эстетика. С. 201.)。

[34] 1819 年から 1832 年にかけてドイツ哲学者 F. アストによってライプツィヒで出版された『プラトン 11 巻著作集』。

ヴェネヴィーチノフの頭の中がプラトンとシェリングという二人のイデアリストのことで一杯だったことが推察されよう。書簡の最後にある「論文」とは、対話篇「アナクサゴラス」をさしているが、後述するように、その内容はプラトンの「詩人追放論」を下敷きにしている。この時期に彼が『国家』を読んでいたことは十分に推測可能であろう。

最後に「プラトンとシェリング」について、ヴェネヴィーチノフがどのように理解していたのかを示しておこう。哲学と詩をテーマとする「伯爵令嬢 NN への書簡」(1826)には、哲学の基礎としてのプラトンの名が見られる。

> 神のごときプラトンは、古代世界において最も完全な哲学の発展を提示し、堅固な基礎を築くさだめにあった。そして現代、その基礎の上にゆるぎなく豪華な女神の寺院が築かれたのだ。何年かしたら、私はあなたにプラトンを読むよう勧めるだろう。あなたはプラトンの中に、深遠な思想と同じぐらいの詩を、思想のためと同じぐらいの感覚のための滋養を見出すだろう。(121)

「プラトンの哲学の教義はシェリング哲学において発展させられた」(498)という注釈にしたがえば「女神の寺院」とは「シェリング哲学」であり、その基礎にプラトンがある。ヴェネヴィーチノフもやはりプラトンとシェリングのつながりを意識しているのである。

4-2.「アナクサゴラス――プラトンの語らい」

「アナクサゴラス――プラトンの語らい Анаксагор. Беседа Платона」(1825、以下「アナクサゴラス」と記す)はプラトンとその弟子で架空の人物アナクサゴラスとの対話篇で、ヴェネヴィーチノフの詩的意識や彼の詩そのものに直接関係する世界や人間の概念が提示されている。ヴェネヴィーチノフの詩人像については、2-2 で触れたように、詩「詩人と友」などに見られる詩人像については分析されてきているものの、この「アナクサゴラス」で描き出される詩人・芸術家像はこれまであまり注目されてきていなかった。短い作品だが、部分的に紹介しながら全体の流れを追っていくこととする。

冒頭ではまず、「黄金時代は詩人の想像などではなく、将来にある」というような会話がつづき、次第に話題はプラトンの「共和国 республика」へと移ってゆく。

> アナクサゴラス：「なぜあなたはご自身の共和国から詩人たちを追放するのですか？」
> プラトン：「私は真の詩人たちを追放したりはしない、だが、彼らには花冠を載せ、私たちの国のことはほっておいてもらうよう頼むつもりだ」
> アナクサゴラス：「もちろんですよ、プラトン。だって一体どんな詩人がこうして追放の憂き目にあうためにあなたの国家へやってきますか？　しかし、あなたが詩を社会にとって、つまりは人間にとって有害だと考えることが証明されてはいませんよね？」
> プラトン：「有害なのではなく、無益なのだ бесполезно。私の共和国は、思考し、そし

て行動するような人々によって作られなければならない。自分の世界の中で喜びに浸って、外部からは何も思想を求めず、つまりは社会全体をより良くするという目的から外れている詩人が、こうした社会に属すことなどできるだろうか？　私を信じてほしい、アナクサゴラスよ、哲学とは最高の詩であるのだよ。」

ここで話題は詩人から哲学へ、個人と人類の話へと変わり、黄金時代到来のためにまず個人が幸せになる必要が説かれる。

プラトン：「赤ん坊を見てみなさい。赤ん坊の魂は完全に自然と調和している。それなのに彼が自然に対して微笑まないのは、彼にはまだ一つの感覚、完全な自己認識 самопознание が不足しているからだ。［…］若者を、大人を見てみなさい。経験からくる願望とは何を意味しているだろう？　彼がいろいろと企図し行動する原因とは、幸福のイデア以外に、人間が自己を自ら認識する человек познает самого себя 段階にまで到達したいという願望以外の何にあるだろうか？［…］最後に老人を見てみなさい。老人は霊感にみちたまなざしを過去に投げかけ、そして、彼にとって世界の嵐はすべておさまったこと、労働の道が彼を望まれた目標へ、すなわち独立と満足へ導いたことを理解している。これぞ人間の生涯だ！　それはまた原初へ帰ってゆく。今度は人類の歩みを見てみよう、そうすれば、私たちの謎は完全に解決されるだろう。黄金時代を君はどのように思い描いているのかね？」

プラトンの話の内容は黄金時代に戻り、自然の王である原初の人間、さらに芸術家についての対話となる。

プラトン：「アポロンのイデアに打ち負かされたフィディアスを考えてみなさい。彼の魂の中には完全な安らぎ、完全な静けさがある。しかし、彼はこの感覚に満足しているだろうか？　もしも彼の喜びが完全なものであったのなら、どうして彼は鑿を取るのだろうか？　もしも彼の理想がはっきりしているのなら、どうして彼はそれを表現しようとするのだろうか？　ちがうのだ、アナクサゴラスよ！　この静けさは、嵐の前のものだ。霊感にみちた芸術家が、己の芸術のすべての困難を克服し、その思いを無感覚な大理石に伝えたとき、ようやく真の安らぎが彼の魂にやってくるのだ。彼は己の力を知った、そして彼には既に馴染み深い世界の中で喜びに浸るのだ。」

そして、芸術家についてのこうした言及が人間についても当てはまること、生きることは創造することであるということ、および幸福な時代の到来が述べられる。

プラトン：「人間のすべての認識はまざりあってひとつの人間のイデアとなり、学問の

すべての分野はまざりあってひとつの自己認識の学問となるのだ。」

(以上 122-127、下線強調は引用者)

こうして対話は終了する。対話篇全体の流れを端的に言うならば、詩人追放論から、自己認識の概念へ、さらに自己認識を獲得した芸術家が登場し、模倣の領域を超えたこの芸術家は世界の中で喜びを知る、つまり、真の芸術家は共和国から追放されない、ということになる。

ここで「アナクサゴラス」における登場人物プラトンの発言を 5 つの点にまとめておく。

第 1 点：あたかも『国家』の対話の続きのように、プラトンとアナクサゴラスの対話がなされる。そしてこれはプラトンが『国家』で余地を残した、詩の側からの弁明でもある。

第 2 点：オドーエフスキーの反論とは異なり、「詩人追放論」は覆されない。真の詩人は追放されない。追放されるべきは「自分の世界の中で喜びに浸って、外部からは何も思想を求めず、つまりは社会全体をより良くするという目的から外れている詩人」、「無益」な詩人である。この「無益」という言葉はプラトンの「詩人追放論」にも見られる。

第 3 点：「哲学とは最高の詩」であること。ヴェネヴィーチノフは「詩人追放論」で哲学と詩の仲違いを述べていたプラトンにこの対立を解消させている。

第 4 点：詩の問題が、人間およびその内面の問題へと向かってゆく。

第 5 点：人間にとって最も大切なのは「自己認識」である。そして、作品の最後に描かれる真の芸術家（己の力を知る者=自己認識）は、世界の中で喜びを覚えている。

さて「アナクサゴラス」の注釈には「認識の 3 段階［赤ん坊、大人、老人］[35]について、来るべき調和［黄金時代は未来にあること］についての基本的思想など、ヴェネヴィーチノフがシェリングの自然哲学（そこでは、とりわけプラトンのイデアの理論が発展させられている）や「先験的観念論の体系」（人間の 3 段階の成長）に精通していることを証明している」(498)とある。つまり、ここでプラトンの口を通して語られることには、ヴェネヴィーチノフによって咀嚼されたシェリングの思想が含まれており、彼によってプラトンとシェリングの思想がうまくブレンドされているのである。以下では、「アナクサゴラス」を二つの点から検討し、この作品を執筆したヴェネヴィーチノフの意図を探っていく。

### 4-3. 社会的利益

2-2 で愛智会のメンバーが考える詩の役割について述べたが、文学史上におけるプーシキンと愛智会の関係を論じながら、マズールは「アナクサゴラス」を取り上げている。マズールは「『芸術の社会的利益への服従』は『モスクワの若者たち』［愛智会］にとって不変の

[35]「人間の 3 つの成長期と、原初的状況からより高い喜びの段階への再生に関する思想自体、もちろんオリジナルであるとは言えない。この思想は多くの思想家に見られるが、シェリングもまたこれを発展させている」(*Манн Ю.В.* Русская философская эстетика. С. 29-30.)。

原理であった」[36]としてこの主張をプーシキン[37]の『モーツァルトとサリエリ Моцарт и Сальери』[38](1830)と結びつけ、この劇作品が「「モスクワ的」天才概念に対するプーシキンの主要な回答」[39]ではなかったかという仮説を唱える。そして、「和音を代数学で確かめる」理論的なサリエリと（ヴェネヴィーチノフも含めて）数学好きの多い「モスクワの若者たち」との共通性を指摘している。マズールの議論はやや大胆だと思われるが、本論文ではマズールの触れていないプラトンの「詩人追放論」をふまえ、「利益／有益／無益(польза / полезно / бесполезно)」という言葉のレベルで、「アナクサゴラス」と合わせてサリエリとモーツァルトについて考えたい。

サリエリは「やつ［モーツァルト］という人間の中に、何か有益なものがあるのか？ Что пользы в нем?」と自問するが、これは言葉のレベルで「アナクサゴラス」の「利益／有益／無益」と響きあう。同じ言葉がモーツァルトの死の直前のセリフにも現れてくる。

> みんなが、こんなふうに、／音の調和の力を感じとれたらなあ！／いや、だめだ、そうなれば世界も存在できなくなる。／日々の雑事にかかわる人間がいなくなって、／みんなが自由な芸術に没頭することになってしまう。／僕たちは選ばれた少数者なんだ、／いやしい利益 польза のことなどかえりみず、気ままに生きる幸せ者、／ただ美しきものにのみ仕える祭司 жрец だ。[40]［下線強調は引用者］

モーツァルトのこうした自覚は、「アナクサゴラス」でプラトンの言う「自分の世界の中で喜びに浸って、外部からは何も思想を求めず、つまりは社会全体をより良くするという目的から外れている詩人」、追放されるべき詩人のイメージと重なってくる。プラットはヴェネヴィーチノフとプーシキンの共通点として「『祭司』としての詩人」を挙げていたが、モーツァルトのセリフの最後にもやはり「祭司」が含まれている。しかし、「芸術の社会的利益への服従」という点から見るならば、むしろヴェネヴィーチノフとプーシキンの詩人像は好対照の立場になり、共通点ではなく差異が浮かび上がってくるのだ。

ちなみに「利益／有益／無益」という言葉は、ヴェネヴィーチノフの多くの著作において散見される。例えば、「アナクサゴラス」の直後に書かれた「雑誌計画にあたってのいくつかの考察 Несколько мыслей в план журнала」(1826)では、ロシア文学、文化の「利益」について論じられているし、「アナクサゴラス」以前に愛智会の集会のために書かれた「ペン

---

[36] *Мазур Н.Н.* Пушкин и «московские юноши»: вокруг проблемы гения // Пушкинская конференция в Стэнфорде 1999: Материалы и исследования (Материалы и исследования по истории русской культуры. Вы. 7). М.: ОГИ, 2001. С. 60.

[37] 愛智会のメンバーたちがプーシキンを高く評価していたのに対して、「ヴェネヴィーチノフはプーシキンを詩の教師としてだけではなく、精神的同盟者として見ていた」(484)。

[38] 『モーツァルトとサリエリ』の日本語訳については、プーシキン著、郡伸哉訳『青銅の騎士　小さな悲劇』群像社、2002 年を参照した。

[39] *Мазур Н.Н.* Пушкин и «московские юноши»: вокруг проблемы гения. С. 83.

[40] *Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений в 17 т. М.: Воскресенье, 1994-1997. Т. 7. С. 133.

で書かれしもの、斧で割られることなし Что написано пером, того не вырубить топором」(1824)でも、「人間は自分自身のためにではなく、人類のために生まれたのであり、その目的は人類の利益 польза человечества である」(232)とされ、「我らが民」、「ロシア」、「有機界」にとって「我々［ロシアの若者］は有益であるだろうか？ полезны ли мы?」という問題提起がなされている。「利益／有益／無益」という言葉に注目すると、ヴェネヴィーチノフとプラトンの社会に対する意識が共鳴しており、「アナクサゴラス」で詩人の社会的な「利益」について語るプラトンが、ヴェネヴィーチノフの著作の中に無理なく収まっているのが理解できるだろう。

4-4.　自己認識

では、ヴェネヴィーチノフは何をもって有益な詩人であろうとしたのだろうか。その答えが「自己認識」である。詩の役割についてはメンバーがそれぞれに主張していたが、より詳細に、何によって社会に利益をもたらすべきかを考えたのが彼らしい点であり、「自己認識」は愛智会全体においても、シェリング哲学においても重要な概念である。

シェリング哲学の導入者の一人で、愛智会の後見人であるパーヴロフは『ムネモシュネー』に収録された論文「自然研究の方法について О способах исследования Природы」で自然との調和を論じ、「あらゆる知の始まりは自己認識 самопознание の中にある」(IV-33)と結論している。これはシェリングの『先験的観念論の体系』の冒頭にある「最初の知識は我々にとって疑いもなく我々自身に関する知識［自己認識］、即ち自覚である」(2-355)ということ、そして「自覚は我々にとって存在の一種ではなく、知識の一種であり、しかも一般に我々に対して存するところの最高の、そして最極のものである」(2-356)という考えが念頭にあるようだ。ヴェネヴィーチノフもこの思想を受け継いでおり、ほぼ同じことを「雑誌計画にあたってのいくつかの考察」において記している。

> 何ゆえに知への情熱があるのか？　「自己認識のためだ」――自然の書物は我々に答える。自己認識とは、全世界を人格化する唯一の強力な理念である。人間の目的であり、極致である。芸術家は己の感覚を現実化するため、その力を確信するため、キャンバスと大理石を人格化し、詩人は芸術という手段によって自然や運命との戦いを請け負う［…］啓蒙、あるいは民族の自己認識が目指すものとは、民族が自らの行動を自覚し、行動の領域を確定する段階である。例えば、古代ギリシャの芸術は、さらに言うならば、古代ギリシャの精神は、プラトンとアリストテレスの著作の中に反映された。このように、ドイツの最新哲学も、真の民族の詩人たちを鼓舞してきた同じ熱意の果実であり、シラーやゲーテを飛翔させた高い目標へ向かう同じ志の果実なのである。(128)

大理石を人格化する芸術家の形象は「アナクサゴラス」のそれを思い出させるが、さらに「プラトンとアリストテレス」と「ドイツの最新哲学」を「民族の自己認識」のもとに

ならべ、真の詩人にまで触れている。こうして見てくると、「アナクサゴラス」の直後に書かれた「雑誌計画にあたってのいくつかの考察」が、「アナクサゴラス」の内容の別の視点からの言い換えであることがわかるだろう。そして「アナクサゴラス」で名指しされていなかった「自己認識」をめぐるシェリングとプラトン、およびそこから飛翔する真の詩の密接な関連が明らかになってくるのである。この「考察」は『ムネモシュネー』の後継誌『モスクワ通報 Московский вестник』(1827-1830)の内容に関する編集者ポゴージンへの進言であるが、彼はこうした哲学を学問や芸術に適用することこそ、ロシアの自立性の基礎として必要だと結論している。「アナクサゴラス」でプラトンに語らせていた自らの青写真を、ヴェネヴィーチノフは「社会に利益をもたらす詩人」の活動の場として、雑誌刊行という形態でいまや実行に移そうとしているのである。残念ながらこの翌年に彼は亡くなってしまうのであるが（チェルヌィシェフスキイは、「ヴェネヴィーチノフがあと 10 年でも生きていたなら、彼はわが国の文学を何十年分も前進させたことだろう」[41]と記している)。

4-5. まとめ――「アナクサゴラス」とその詩人像の意味

プラトンとシェリングにはもとより思想の類縁性が認められるが、19 世紀前半のロシアにおいてはそれが特に強く意識されていた。愛智会のメンバーも同様にこの当時のロシア特有の意識を持っていたであろう。だが、自然観の他、詩や詩人に関する考えについてもシェリングに共鳴していた彼らの場合には、さらに「詩人追放論」によってプラトンとシェリングの大きな違いにも直面することとなった。プラトンの『国家』を読んでいたと思われるヴェネヴィーチノフはそこでシェリングの背後からはみ出したプラトンの姿を受け止め、二人の思想家を調和させる独自の詩人像を築こうとした。これまで愛智会の詩人たちに特徴的な詩人像としては、シェリング哲学に関連づけられた「霊感に満ちた詩人」、「選ばれた者」、「最高の知識と啓示の持ち主、天才」などが論じられ、プーシキンの詩人像とも類縁性があると指摘されてきた。しかし、「アナクサゴラス」からはプーシキンにはない、むしろその対極と言える「社会にとって「有益」な芸術家」という側面が現れてきた。論文「ペンで書かれしもの、斧で割られることなし」で社会に対して自らが与える利益を自問していたヴェネヴィーチノフにとって、プラトンの「詩人追放論」における「国のあり方と人間の生活のために有益ではない」詩／詩人は反面教師として捉えられたのである。

「アナクサゴラス」は『国家』の中で語られていた、詩の有益性を「詩のために弁じる機会」であり、他ならぬプラトンの口からその弁明が語られることになった。そして、プラトンの「詩人追放論」での「有益とは？」という問いに対して、ヴェネヴィーチノフが提示した答えが「自己認識」の概念であった。そして、己の力を知り、世界の中で喜びに浸る芸術家の姿の中でシェリングとプラトンの思想は見事に調和していると言えるだろう。ヴェネヴィーチノフは「自己認識」という概念をあらたに加えることで、社会にとって「有益」な、来るべき黄金時代のための独自の芸術家・詩人像を作り上げているのである。

---

[41] *Чернышевский Н.Г.* Полное собрание сочинений в 16 т. М.: Худ. лит., 1939-1953. Т. 2. С. 926.

## おわりに――ロシア詩の歴史におけるヴェネヴィーチノフの詩人観

最後に、「アナクサゴラス」に見られるヴェネヴィーチノフの詩人観がロシア文学史においてどのような位置にあるのかを考えたい。「社会における詩／詩人の役割」という視点で、文学史にはバーエフスキーによる以下のような記述がある。

> 古典主義にとって、詩とは国家の、女帝の召使であった。一私人の個人的な行為としての詩という思想は、初めはスマローコフのもとでかなりぎこちなく、それから 18 世紀から 19 世紀への変わり目により大胆に形成されていった。プーシキンが最大限の力と明確さで幾度も表現したのは、詩は国家にも、社会にも従属するものではなく、詩の課題は詩の外には存在しないということである[42]。

プーシキンの描く詩人は自由奔放に生きる。例えば、「詩人と民衆の対立」のテーマが明確に現れている詩「詩人に Поэту」(1830)は、「詩人よ、民衆の愛などほっておけ」と始まり、「おまえはツァーリ。だから一人で生きるのだ。自由の道を／ゆけ、自由な知恵の導くほうへ」[43]と、詩の気高さと国家や社会にとらわれない自立性が歌われている。これはプラトンの「詩人追放論」を受け入れて、国家や民衆と訣別してゆく詩人の姿そのものである。

1830 年代後半、レールモントフは詩「詩人 Поэт」(1838)の中で、詩人を自由への戦いの象徴である「短刀」にたとえた。しかし、それは「かつて人々が必要とした」もので、今は「自分の使命を失って」[44]おり、詩人が社会の中で活躍した時代へのノスタルジアでしかない。

そのなかで、ヴェネヴィーチノフの「いかなる詩人／芸術家が社会にとって「有益」であるか」という問いかけは、愛智会のひとつ前の世代にあたるデカブリストたちに通じている。ギンズブルグはデカブリストの詩について次のように記している。

> ニコライ・トゥルゲーネフ、ニキータ・ムラヴィヨーフ、ミハイル・オルローフ、トゥルベツコーイといった活動家たちにおいては、若い頃からの啓蒙活動と市民的自覚は、国家活動に対する自分たちの使命についての確信と結びついていた[45]。

年齢差はほとんどないにもかかわらず、「愛智会」の世代（おもに 1800 年代生まれ）と「デカブリスト」の世代（おもに 1790 年代生まれ）は、「全く異なる世代」[46]とされることもある。だが、雑誌『ムネモシュネー』にはキュヘリベーケルが参加しているように世代

---

[42] *Баевский В.С.* История русской поэзии: 1730-1980. Компендиум. Издание 2-ое. Смоленск: Русич, 1994. С. 117. なお、ヴェネヴィーチノフは詩が「政治の道具」となることを否定している(157)。
[43] *Пушкин А.С.* Полное собрание сочинений в 17 т. Т. 3-1. С. 223.
[44] *Лермонтов М.Ю.* Избранные произведения. Л.: Лениздат, 1979. С. 108-109.
[45] *Гинзбург Л.Я.* О лирике. С. 126.
[46] *Кожинов В.В.* Тютчев. М.: Соратник, 1988. С. 137.

間の接点がなかったわけではない。また、1826 年にデカブリストとの関係を疑われて逮捕されたヴェネヴィーチノフは、「愛智会」の中でもデカブリストに近い存在であった。「アナクサゴラス」がデカブリストの乱（1825 年 12 月）の間近に迫った 1825 年 7 月に書かれていることも、内容を分析する上で考慮しておく必要があるだろう。

シェリング哲学の影響のもとに「選ばれた者」でありながら、一方で社会の利益を模索する詩人ヴェネヴィーチノフ。そして、彼が取り上げた「自己認識」のテーマは、プーシキンやレールモントフの個の追及、チュッチェフの内面的な世界分析、さらにはフェートらの芸術至上主義的な詩の基礎ともなるものである。プラトンとシェリングの思想を反発させることなく彼が作り出した詩人像とは、歴史的にも内容的にも「デカブリスト詩人たちの市民詩から、個を解放するロマン主義詩へ」と移行していく、その過渡期の詩人像だと言えるだろう。また、プラトンの『国家』の「詩人追放論」は、1820 年代のロシアにおいて検討に値するだけのアクチュアリティーを持っていたのである。

召使ではなく、社会に利益をもたらすような新しいテーマを持った詩人、プラトンがその国家に迎え入れたかったのはヴェネヴィーチノフのような詩人であったのかもしれない。